

# 中世末期中央語の主語標示 と ガの機能の歴史的変化

竹内 史郎（成城大学）

国立国語研究所シンポジウム  
係り結びと格の通方言的・通時的研究  
2020年9月19、20日

# 後半のセッションについて

京都の格標示の歴史、とくに中世から現代までを扱う。

言語類型論の観点を取り入れて、格配列、格配列の変化、変化の動機などについて論じる。

竹内が中世末期、坂井が近世・近代、中川が現代を担当する。

# 主節に生じた格標示（非焦点標示）における京都の歴史的変化（現代京都は竹内・松丸2019, 2020）

上代から中世 → 中世末期 → 現代京都

S<sub>∅</sub>

S<sub>ガ/∅</sub>

S<sub>ガ/∅</sub>

A<sub>∅</sub> P<sub>ヲ/∅</sub>

A<sub>ガ/∅</sub> P<sub>オ/∅</sub>

A<sub>ガ/∅</sub> P<sub>∅</sub>

主格：無標  
対格：有標性

主格：有標性  
対格：有標性

主格：有標性  
対格：無標



はじめに

# 主節のタイプの減少とノーマルな主節

上代から中世まで

- 終止形節
- 連体形節
- 已然形節
- 命令形節



中世

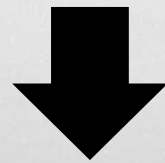
- 新連体形節
- 已然形節
- 命令形節

この発表では、終止形節と新連体形節をノーマルな主節と理解し、以下ではこれらを「主節」と呼ぶこととする。

# ガの出現環境：従属節から主節へ

## 上代から中世まで

節末がド、ドモとなる場合を除く従属節、主節であれば連体形節・已然形節に現れることを条件として、基本的に代名詞主語、固有名詞主語、ある種の人間名詞主語を任意に標示した（竹内2020a、詳しくは後述）



## 中世以降

従属節に加えて、主節の主語を任意に (?) 標示した

# 主節に生じた格標示（非焦点標示）における京都の歴史的変化（現代京都は竹内・松丸2019, 2020）

上代から中世 → 中世末期 → 現代京都

S<sub>∅</sub>

S<sub>ガ/∅</sub>

S<sub>ガ/∅</sub>

A<sub>∅</sub> P<sub>ヲ/∅</sub>

A<sub>ガ/∅</sub> P<sub>オ/∅</sub>

A<sub>ガ/∅</sub> P<sub>∅</sub>

主格：無標  
対格：有標性

主格：有標性  
対格：有標性

主格：有標性  
対格：無標

# この発表の内容と目的

1. 言語類型論の観点を取り入れて、中世末期中央語における主節の格配列の分析を行う
2. 主節の主語標示におけるガと $\emptyset$ の交替現象が何によるものなのかを明らかにする
3. 中世中央語において生じた格配列の変化（＝ガの参入）の動機と経路を明らかにする



# 以下の発表の構成


合理的な格配列からそうではない格配列へ

主節の主語をガで標示する動機

主節の主語をガで標示することになる起源

ガの機能の歴史的変化

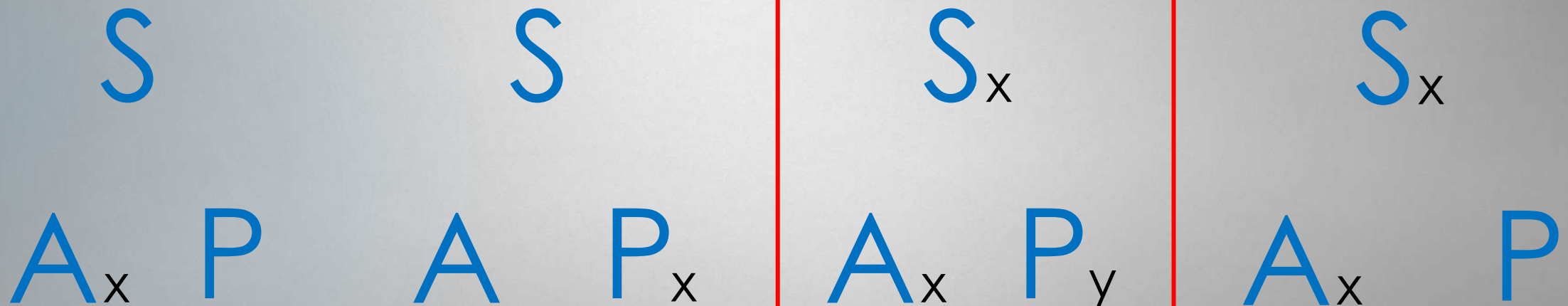
まとめ



合理的な格配列から  
非合理的な格配列へ

# 相互識別仮説 : Greenberg (1963), Comrie (1989), Dixon (1994), 下地発表 など

格標示の機能をA, S, Pの相互識別に求める見方、とくにAとPの相互識別に求める見方からすれば...



能格絶対格型

主格対格型

# 相互識別仮説の観点からみた 中世以前の主節の格配列

S<sub>∅</sub>

A<sub>∅</sub>

P<sub>ヲ/∅</sub>

1. AとPの相互識別に無標・有標の関係が認められる。
2. 述語の唯一の項である、Sには有形の格標示が与えられていない。
3. Pの標示に∅とヲの2つがあり、完全な対格型とはいえない。

3つ目の点については説明が必要

# 竹内 (2020b)

名詞句階層に基づく  
古代語の主節の目的語標示

□ は用例なし、□ は用例あり

	1人称	2人称	3人称	固有名詞	人間名詞	動物名詞	無生名詞
∅	□	□	□	□	□	□	□
ヲ	□	□	□	□	□	□	□

ヲの標示が義務的

ヲの標示が任意

# 相互識別仮説の観点からみた 中世に新たに生じた主節の格配列

S<sub>ガ/∅</sub>

A<sub>ガ/∅</sub>

P<sub>オ/∅</sub>

1. AとPの相互識別に無標・有標の関係が認められない。
2. 述語の唯一の項である、Sにも有形の格標示が与えられている。
3. Pの標示に∅とオの2つがあり、...

3つ目の点については今後の調査が必要

どうして合理的とも言える配列から、  
そうではない配列へ変化したのか？

### 仮説 1

相互識別の観点に立つから「合理的とも言える配列から、  
そうではない配列」と言えるのであって、別の観点を取り入れ  
れば、違った説明もあるのではないか。

### 仮説 2

相互識別のためにはオがあれば事足りるところに、A, Sがガ  
で標示されることになるわけであるから、A, Sがガで標示さ  
れることになる動機は相互識別ではない。では、A, Sがガで  
標示される動機は何か？

# 先行研究においてわかっていること

江口 (1994), 山田 (2010), 菊田 (2006)

係助詞ゾは、覚一本平家物語では会話文において用いられず、また、天草版平家物語では地の文・会話文にかかわらず、ほとんど見られない。→ 主節の格標示が焦点化の機能を果たしている可能性に十分注意しなければならない

山田 (2010)

ゾに代わってガが伸長していったのではなく、もともと無助詞であったところにガが入り込んできた。



# 山田 (2010)の調査 :

天草版平家物語において (a) に対応する主語の用例数

	連体節内	従属節内	主節内	複文	合計
ガ	36 (20.2%)	152 (33.5%)	84 (27.5%)	18 (2.7%)	290 (18.2%)
ハ	0 (0.0%)	40 (8.8%)	69 (22.5%)	87 (13.3%)	196 (12.3%)
モ	4 (2.3%)	25 (5.5%)	26 (8.5%)	22 (3.4%)	77 (4.8%)
ノ	42 (23.6%)	10 (2.2%)	4 (1.3%)	1 (0.2%)	57 (3.6%)
無	96 (53.9%)	227 (50.0%)	123 (40.2%)	526 (80.4%)	972 (61.1%)
計	178	454	306	654	1592

覚一本平家物語における無助詞主語 (↓ (a) ) の用例数

# 先行説を検討する

安達 (1992), 菊田 (2006), 山田 (2010)ほか多数

主節の主語をガで標示することが歴史的に増えていくことを、「格関係の明示化」「格の明示化」「格助詞の明示化」と述べる。

山田 (2010) : 「内項の明示化」先行説

ガによる主語標示は「内項の明示化」から進んだ。天草版平家物語では「外項の明示化」は未発達であった。

# 先行説を検討する

下地 (2019) : 有標主格パターンにおける主格分布の予測

通方言的に見て、「主題ではないこと」を示す脱主題化標識であるガ系の標示は、名詞句の内在的な役割に反する場合にその必要性が高まる。

	名詞句階層上位	下位
A	主格助詞	
SA (動作主 S)		
SP (被動物 S)		
P		

# 主節主語をガで標示 する動機



# データについて

- 大英図書館蔵『天草版平家物語』巻第一から巻第三まで（1590年）を調査。
- 主節（引用節を含む）のガ格主語を149例、同じく無助詞主語を56例を得た。ガの用例については日本語歴史コーパス（CHJ）を使用。
- まずは基礎的な整理として、得られたガ格主語、無助詞主語の用例について、横軸に名詞句階層を、縦軸に動作主階層を配置した「クロス階層」を用いて分布を示す。

# クロス階層



	代名詞	有生名詞			無生名詞
		固有	人間	動物	
A					
$S_A$					
$S_P$					

# 焦点範囲：述語か、述語句か、文か、項か

cf. Lambrecht (1994), 林 (2017)

述語焦点

「太郎どうだった？」 → 「太郎な— あばれた」

題述焦点

「太郎どうだった？」 → 「太郎 友達たたいた」

文焦点

「どうしたの？」 → 「太郎があばれた」

項焦点

「誰があばれたの？」 → 「太郎が あばれた」

# クロス階層における「名詞主語（代名詞主語 + 語彙名詞主語） = ガ」の用例

	代名詞	有生名詞			無生名詞
		固有	人間	動物	
A	2/2	2/2	1/5	---	---
S <sub>A</sub>	---	1/7	0/21	0/3	---
S <sub>P</sub>	1/1	1/6	2/12	0/2	1/77

※1 スラッシュの右側は非焦点主語の用例数を、左側には焦点主語の用例数を示している。

※2 形容詞述語文および名詞述語文等の主語はS<sub>P</sub>に含めている。



# クロス階層における「名詞主語 = ガ」 の分布の考察

1. 無生/Aは非文ということで用例が見られないとみなす。
2. 代名詞/S<sub>A</sub>、動物/A、無生/S<sub>A</sub>などの項タイプでは用例が見られないが、文法的と考えられる。
3. 主節のガ格主語文は、文焦点構造に加え、項焦点構造も表すことができる。
4. ガの分布に、動作主性あるいは有生性を指向するといったことは認められない。

# クロス階層における「名詞主語 = $\emptyset$ 」 の用例数



	代名詞	有生名詞			無生名詞
		固有	人間	動物	
A	---	0/1	0/5	---	---
S <sub>A</sub>	---	0/6	0/13	---	---
S <sub>P</sub>	---	0/3	0/9	---	0/19

# クロス階層における「名詞主語 = $\emptyset$ 」 の分布の考察

1. 無生/Aは非文ということで用例が見られないとみなす。
2. 代名詞と動物のA, SA, SP、無生/SAなどの項タイプでは用例が見られないが、文法的と考えられる。
3. 主節の無助詞主語文では、項焦点構造を表すことができない。文焦点、述語焦点の構造は可。
4. 無助詞の分布に、動作主性あるいは有生性を指向するといったことは認められない。

# 表せる焦点範囲の比較

述語焦点	文焦点	項焦点
無助詞主語文		
	ガ格主語文	



ガ格主語文と無助詞主語文は、情報構造上の役割が異なっているが、一方でともに文焦点構造を表せるという点が共通している。しかし、文焦点構造においても違いはないだろうか。

# ガ格主語文でしか表せない領域 (1)

## 事態を急展開させる出来事を表すとき

### 「急展開文」の用例数

名詞主語 = ガ	69
名詞主語 = ∅	0



文焦点の環境で、ガ格主語文は、聞き手に注目してほしい情報を示す場合に独占的に用いられる

- 平家これを見て、あわ！源氏の先陣が向かうたぞ：（天草版平家物語・165頁）
- 門を閉ぢて開かなんだに内を聞けば、落人が帰り上ったなどと云うて、夥しゅう騒動して門を叩かれたれども、開けぬに因って、（天草版平家物語・181頁）

# ガ格主語文でしか表せない領域 (2)

## 反語的な問いかけ、肯否疑問文

### 反語、肯否疑問文の用例数

名詞主語 = ガ	16
名詞主語 = ∅	0



文焦点の環境で、ガ格主語文は、聞き手に注目してほしい情報を示す場合に独占的に用いられる

- そこで木曾殿，剛の者と聞いたが，床しさに今まで切らいで置いた，何ほどの事が有らうぞ？ 追い掛けて打てと言われたれば：（天草版平家物語・213頁）
- 鼓判官は戦奉行をして兜ばかりを着て，西の築地の上に上がって，時々舞う折も有り，色々の形掛かりをしたれば，皆公家達あれには天狗が付いたかと言うて笑われて御座った。（天草版平家物語・221頁）

# 無助詞主語文でしか表せない領域 文脈から容易に予期される出来事

文脈から容易に予期される  
文の用例数

名詞主語 = ガ	0
名詞主語 = ∅	6

→ 文焦点の環境で、無助詞主語文は、  
文脈から容易に予期される出来事を  
表すときに独占的に用いられる

- それに因って中頃権帥と申す人余り色が黒う御座ったに因って、見る者共黒帥と異名を付けて御座る。（天草版平家物語・7頁）
- 頼盛ははしたない言柄に成って、門に武士共を置きなどして、御所の内を探し奉らうずると聞こえたれば、これは何とせうぞと有って、御所中の女房達呆れ騒がれた。（天草版平家物語・138頁）

# ただしガ格主語文でも無助詞主語文でも表せそうな領域もある

- 然れども木曾は越後の国をば嫌うて、伊予の国を下された。その時に十人余り源氏の人々が受領をせられた。（天草版平家物語・199頁）
- 同じ二十三日の卯の刻に源氏篠原へ押し寄せて、午の刻まで戦うたが、暫時の合戦に源氏的人数も一千余騎打たるる：（天草版平家物語・169頁）

ガ格主語文でも、無助詞主語文でも通用する、中立的な領域もあるかもしれない。



文焦点における使い分け：  
聞き手に注目してほしい情報を示す場合と  
文脈から容易に予期される情報を示す場合

述語焦点	文焦点			項焦点
	予期	中立	要注目	
無助詞				
		ガ		



中世末期中央語の主節には、機能的に異なる2つのタイプがある！

# 主節の2つのタイプはどのように特徴づけることができるか？ cf . Li and Thompson (1976)

## 主節のガ格主語文

ガで標示することによって非主題主語であることを明示し、主題か否かを区別する。→「主題卓立タイプ」と呼ぶ

## 主節の無助詞主語文

格標示を行わないことで主語であることを示し、主題か否かの区別に関与しない。→「主語卓立タイプ」と呼ぶ

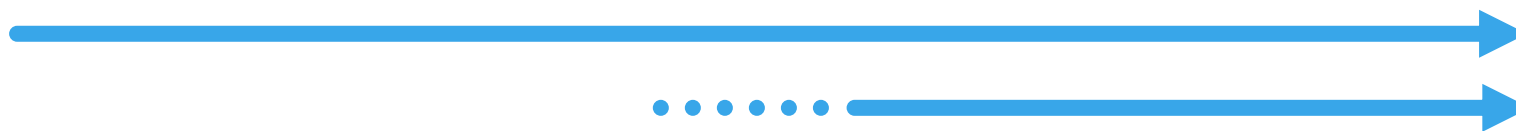
# 中世末期中央語の主節のハイブリッドな性格

- 話し手の情報の提示の仕方により、主語卓立タイプとするか主題卓立タイプとするかの選択が行われている。→ 単なるガと $\emptyset$ の交替ではない
- きわめて顕著に、同一言語内で主題卓立 (Topic-prominent) 現象と主語卓立 (Subject-prominent) 現象が認められる。

# 主節の主語をガで標示する動機

## 主節タイプの歴史的関係

無助詞主語文  
ガ格主語文



## 主節のガ格主語文の機能

ガで標示することによって非主題主語であることを明示し、主題か否かを区別する。


→ガの標示を促すのは相互識別ではなく、項の特性標示機能（脱主題化（Lambrecht2000, 下地2019, 竹内・松丸2019））

→安定して相互識別がはたらくところに、別の標示圧力が加わり、相互識別の観点からすると余剰を含む格配列（AもPも有形格標示され得る）が生じたと説明できる

→格標示が不要であるSがガで標示されることも説明できる

# 「格関係の明示化」「格の明示化」「格助詞の明示化」と述べる説の問題点

1. 言語が「未分化表現」から「分析的表現」を目指していくことが前提としてあるようだが、こう考えなければならない理由が示されていない。
2. そもそも古代語は「未分化」ではない（竹内2020b）。
3. また有標主格性の格配列である現代京都方言が「分析的」であるとも言いがたい（竹内・松丸2019, 2020）。
4. 文献から知られる話し言葉の歴史が、系統関係にある現代京都方言ではなく、実体のわからない「近代語」（標準語書き言葉こと？）につながると見ている。



主節主語をガで標示  
することになる起源

# 下地仮説と中世末期中央語の主節のガ

下地 (2019) : 有標主格パターンにおける主格分布の予測

通方言的に見て、「主題ではないこと」を示す脱主題化標識であるガ系の標示は、名詞句の内在的な役割に反する場合にその必要性が高まる。

	名詞句階層上位	下位	
A	主格助詞		
SA (動作主 S)			名詞句階層上位 > 下位
SP (被動物 S)			
P			A > SA > SP > P

# クロス階層における「名詞主語 = ガ」 の用例数（再掲）

	代名詞	有生名詞			無生名詞
		固有	人間	動物	
A	2/2	2/2	1/5	---	---
S <sub>A</sub>	---	1/7	0/21	0/3	---
S <sub>P</sub>	1/1	1/6	2/12	0/2	1/77

「名詞主語 = ガ」において、下地仮説（有標主格パターンにおける主格分布の予測）に適っているかわからない。



# 主節における「名詞主語 = ガ」のもっとも早いと思われる例

- 藁一筋が柑子三つになりぬ。（宇治拾遺物語 [1220年] ・ 241頁）

→ SP/無生

- 柑子三つが布三疋になりたり。（宇治拾遺物語 [1220年] ・ 241頁）

→ SP/無生

- また夕方になれば、今日は新院の御分とて、景房が御事したり。（とはずがたり [1306年] ・ 378頁）

→ SA/有生

SP/無生の例が先であり、下地仮説が予測するあり方に外れるか。

# 野村 (1996)による調査から

## ■主節の「節主語 = ガ」と「節主語 = ∅」の調査

※数値は用例数

	源氏物語	枕草子	今昔物語集	宇治拾遺物語	延慶本平家物語	覚一本平家物語
節主語 = ガ	1	3	38	45	142	<u>130</u>
節主語 = ∅	100	72	130	26	7	2

## ■主節の「名詞主語 = ガ」の調査

	源氏物語	宇治拾遺物語	覚一本平家物語
名詞主語 = ガ	0	3	<u>19</u>



主節へのガの参入  
節主語 → 名詞主語

主節の「節主語 = ガ」のあり方が、主節の「名詞主語 = ガ」に影響を与えた

# 先んじた「節主語 = ガ」において、 下地仮説が適用されるかどうか

節主語を標示するガか接続助詞のガかの見極めが難しい例もあるが、石垣 (1955)の示す基準に従い、主節の「節主語 = ガ」の例を取り出す。

## 天草版平家物語

節主語 = ガ	11
節主語 = ∅	0

- 経盛の嫡子経正御幸に供奉せられたが，泣く泣く．．．と，読まれました。（天草版平家物語・196頁）
- 主上に成らうと思えども，童部に成っては用も無し：法皇に成らうと思えども，法師に成らうが可笑しい；（天草版平家物語・224頁）

# クロス階層における「節主語 = ガ」の 用例数（中世末期）

	代名詞	有生名詞			無生名詞
		固有	人間	動物	
A			0/1	---	---
S <sub>A</sub>			0/1	---	---
S <sub>P</sub>			0/4	0/1	0/4

やはり下地仮説に適っているかどうかわからない。

# ならば、主節の「節主語 = ガ」が出現し始めた頃の例を見てみる

## ■ 主節の「節主語 = ガ」の発表者の調査

	源氏物語	枕草子	更科日記	大鏡	讃岐典侍日記	宇治拾遺物語	計
節主語 = ガ	0	2	1	1	1	11	16

- 大尼君の孫の紀伊守なりけるが、このころ上りて来たり。（源氏物語・6・356頁）

→ こうしたテ形節を介在する例は含めない。元来ガの出現環境は従属節の中なので線引きしておく必要がある。

# クロス階層における「節主語 = ガ」の 用例数（およそ1000年～1220年くらい）

	代名詞	有生名詞			無生名詞
		固有	人間	動物	
A			0/2	---	---
S <sub>A</sub>			0/5	---	---
S <sub>P</sub>			0/2	---	0/7

主節の節主語をガが標示し始める際、その根源的な動機において、  
内在的主題性は関与しなかったのではないか。

# 初期の「節主語 = ガ」を含む文の談話 機能的・意味的な限定

## 新規の参与者による新規の出来事の出来を述べる 14例

- その山の麓の里に、年八十ばかりなる女の住みけるが、日に一度、その山の峯にある卒都婆を必ず見けり。（宇治拾遺物語 [1220年] ・ 241頁）
- 「...今に心やすくよしあきらめつれば、のちの世もやすく」とありし聞きしが、さまでおぼすらんとありしが、まづ思ひ出でらる。（讃岐典侍日記 [1110年] ・ 445頁）

## ある出来事に刺激された感情の表出を述べる 2例

- 「まことぞ。をこなりと見てかく笑ひいするが、はづかし」などのたまはするほどに（枕草子 [1001年] ・ 396頁）

# 焦点構造別にみた文脈依存性の度合い

## 述語焦点構文、題述焦点構文、項焦点構文

項の役割（意味役割、文法関係）が文脈に依存して定まり得る。よって、必ずしも主題/主語である項を明示する必要がない。

- 白鵬 貴景勝 押し出シタナー → 「白鵬」「貴景勝」どちらも文脈次第で「主語かつ動作主」と解釈される

## 文焦点構文

項の役割（意味役割、文法関係）が文脈に依存して定まることがない。出来事のすべての参加者が、いっぺんに、必ず表現される。

- 白鵬 貴景勝 押し出シタ → 先行する項が「主語かつ動作主」と解釈される

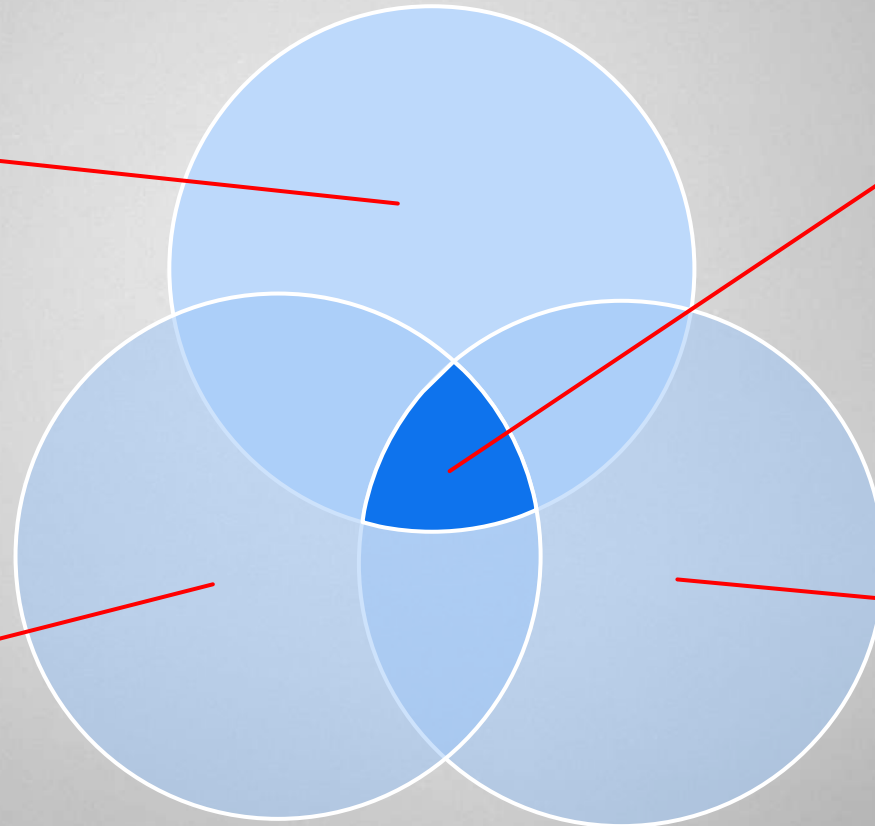
→文焦点構文は、項の役割の同定において、文法的な手段で構造化を行うためのより積極的な動機がある（竹内・松丸2020）。



# 内在的主題性が関わらない、もう一つの脱主題化

複文構造において埋め込まれた節が主語であることを印づけようとする働きかけ（野村1993b）

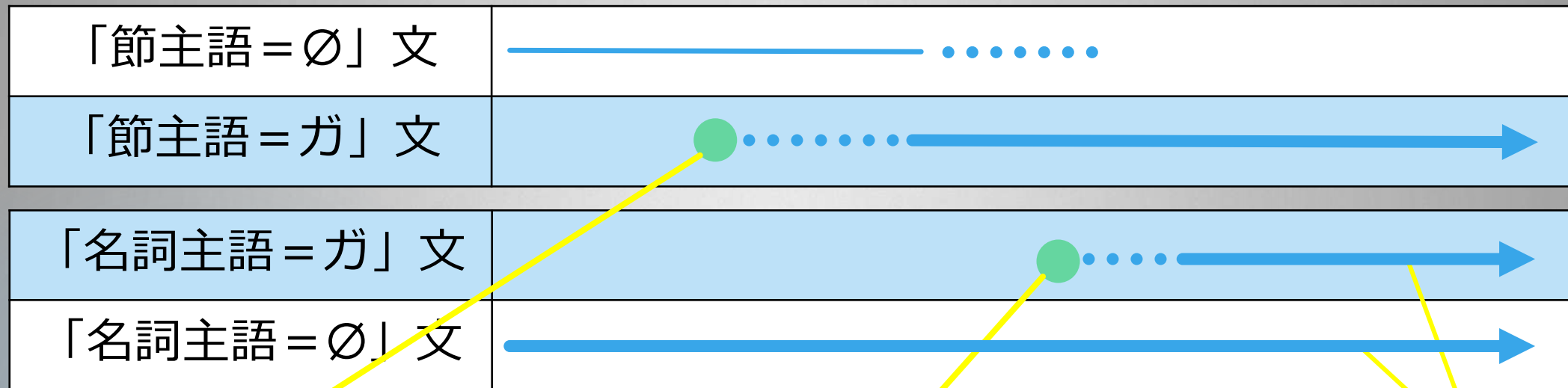
焦点構造に由来する、項の役割を文法的手段で定めようとする働きかけ



主節の節主語へのガの標示圧力

主節の節主語が不定であること

# 主節へのガの参入の展開（起源、動機、経路）まとめ



脱主題化による  
ガの標示圧力

「節主語 = ガ」  
からの類推

主語卓立タイプと主題  
卓立タイプの併存

「節主語 = ガ」文が出現したこと、その後「節主語 = ガ」文からの類推で「名詞主語 + ガ」文が生じたこと、これらの出来事が重要な転機となっている。

# ガの機能の歴史的変 化



# 上代語のガの振る舞いについて

## 竹内 (2020a)

### ガ、ノが現れる環境

節末がド、ドモとなる場合を除く従属節、主節であれば連体形節・已然形節に現れる

	代名詞	有生名詞				無生名詞
		固有	人間 1	人間 2	動物	
A	ガ/∅	ガ/∅, ノ	ガ/∅	ノ/∅	ノ/ガ, ∅	∅, ノ
S <sub>A</sub>	ガ/∅	ガ/∅, ノ	ガ/∅	ノ/∅	ノ/ガ, ∅	∅/ノ, ガ
S <sub>P</sub>	ガ/∅	ガ/∅	ガ/∅	ノ/∅	ノ/ガ, ∅	∅/ノ, ガ

# 巨視的に見た（古代から中世）ガの機能の変化

古代語のガは属格主語標示（genitive subject marking, Frellesvig 2010）か？

ガが副詞節内の主語を標示することをどう考えるか。野村 (1993a)も参照。

名詞主語を標示するガ  
新たな脱主題化の機能を獲得

従属節において内在的主題性の高い主語を  
標示（意味特性標示機能の卓立）

+

主節において、焦点主語であること、また  
は、文全体が聞き手に注目させたい情報  
であることを表す（談話機能の卓立）

節主語を標示するガ  
談話機能の卓立から統語機能卓立へ

主節において文焦点の環境で不定の主語を  
標示（談話機能の卓立）



主節において文焦点の環境であらゆる主語  
を標示（統語機能の卓立）

まとめ


# 参考文献

- 安達隆一 (1992) 「国語構文史の一側面：主語無標示構文から主格標示構文へ」 『古代語の構造と展開 継承と展開 1』 pp. 1-23、和泉書院
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』 岩波書店
- 江口正弘 (1994) 『天草版平家物語の語彙と語法』 笠間書院
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』 岩波書店
- 菊田千春 (2006) 「主格ガの確立と近代日本語の成立：助詞のプロファイルと制約の競合という観点から」 『同志社大学英語英文学研究』 79、 pp. 61-104.
- 下地理則 (2019) 「現代日本共通語 (口語)における分裂自動詞性」 竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の分裂自動詞性』 pp. 1-36、くろしお出版
- 竹内史郎・松丸真大 (2019) 「京都市方言における情報構造と文形態——格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性——」 竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の分裂自動詞性』 pp. 67-102、くろしお出版

- 竹内史郎 (2020a) 「上代語の従属節、主文連体形・已然形節における主語標示——ガ、ノ、無助詞における意味的、統語的な制限の検討——」 青木博史・小柳智一・吉田永弘 (編) 『日本語文法史研究 5』 ひつじ書房
- 竹内史郎・松丸真大 (2020) 「本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について——京都市方言と宮城県登米町方言の分析——」 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格の表現』 くろしお出版
- 竹内史郎 (2020b) 「古代日本語の主文終止形節における格配列、他動詞文の項の識別、無助詞現象について」 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格の表現』 くろしお出版
- 野村剛史 (1993a) 「上代語のノ・ガについて (下)」 『国語国文』 62(3)、pp. 30-49、京都大学文学部国語国文学研究室
- 野村剛史 (1993b) 「古代から中世の「の」と「が」」 『日本語学』 12(11)、pp. 23-33、明治書院



- 野村剛史 (1996) 「ガ・終止形へ」 『国語国文』 65(5)、 pp. 524-541、京都大学文学部国語国文学研究室
- 林由華 (2017) 「南琉球宮古語池間西原方言におけるdu 焦点構文と述語焦点形」 『阪大社会言語学研究ノート』 15、 pp. 87-99.
- 山田昌裕 (2010) 『格助詞「ガ」の通時的的研究』 ひつじ書房
- Comrie, Bernard (1989) *Language Universals and Linguistic Typology : Syntax and morphology*, 2<sup>nd</sup> edition. Oxford: Blackwell.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frellesvig, B. (2010) *A History of the Japanese Language*, New York: Cambridge University Press.
- Greenberg, Joseph H. (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements, In Greenberg, Joseph H. ed., *Universals of Language*, 58-90, Cambridge, MA: MIT Press.

- 
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge: Cambridge University Press.
  - Lambrecht, Knud (2000) When Subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in Sentence-Focus Constructions across languages, *Studies in Language* 24(3), 611-682.
  - Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976) Subject and Topic: A New Typology of Language, In Charles N. Li. ed., *Subject and Topic*, 457-489, New York: Academic Press.